

火薬類取締法施行規則関係例示基準（製造）

この火薬類取締法施行規則関係例示基準（以下「例示基準」という。）は、火薬類取締法施行規則（昭和25年10月31日通商産業省令第88号。以下「施行規則」という。）に定める技術的要件を満たす技術的内容をできるだけ具体的に示したものである。

なお、施行規則に定める技術的要件を満たすものと認められる技術的内容はこの例示基準に限定されるものではなく、施行規則に照らして十分な保安水準の確保が達成できる技術的根拠があれば、施行規則に適合するものと判断するものである。

施行規則第4条第1項第1号

一 製造所内の見やすい場所に火薬類の製造所である旨の標識を掲げ、かつ、爆発又は発火に関し必要な事項を掲示し、製造所内は、危険区域を明瞭に定め、危険区域の周囲には、危険区域が明確に判別できるような措置を講じ、見やすい場所に警戒札を掲示すること。

●施行規則第4条第1項第1号に規定する危険区域が明確に判別できるような措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。

1. 境界線に柵、ロープ等を設置すること。
2. 境界線上にラインを引くこと。

施行規則第4条第1項第3号

三 危険区域の境界が森林内に設けられた場合には、火災による延焼を防止するための措置を講ずること。

●施行規則第4条第1項第3号に規定する延焼を防止するための措置とは、危険区域に隣接する森林と危険区域の境界線との間に幅2 m以上の防火のための空地を設けることとする。

(※) 森林から製造所に向けての火災、製造所から森林へ向けての火災を共に考慮する。

施行規則第4条第1項第9号の3

九の三 無煙火薬を存置する火薬類一時置場（火工品の原料として使用する無煙火薬を存置する火薬類一時置場を除く。第二十六号の二において同じ。）には、当該無煙火薬の分解及び発火を防止するための措置並びに当該無煙火薬が発火したときに爆発を防止するための措置を講ずること。

●施行規則第4条第1項第9号の3に規定する無煙火薬の分解及び発火を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 床面から1.5mの高さに温湿度記録計を設置すること。
2. 当該火薬類一時置場内の温度を40度以下に保ち、かつ、相対湿度を75%以下に保つこと。この場合において、温湿度調整装置を設置するときは、当該火薬類一時置場の構造及び当該無煙火薬の種類に応じて、防爆性能を有する構造のものを設置すること。
3. 当該火薬類一時置場に窓を設ける場合には、暗幕その他の遮光のための設備を設けること。

●施行規則第4条第1項第9号の3に規定する無煙火薬が発火したときに爆発を防止するための措置とは、次に掲げる基準に適合するスプリンクラー設備を設けることとする。

1. スプリンクラーヘッドは、開放型スプリンクラーヘッドとし、当該火薬類一時置場の天井又は小屋裏で室内に面する部分に、消防法施行規則(昭和36年自治省令第6号)第13条の2第4項第1号ニ及びホに規定する技術上の基準に従い、かつ、当該天井又は小屋裏の各部分から一のスプリンクラーヘッドまでの水平距離が、1.7m以下となるように設けること。
2. 水源は、スプリンクラーヘッドの個数に1.6m<sup>3</sup>を乗じて得た量以上の量となるように設けること。この場合において、水源に連結する加圧送水装置（消防法施行規則第14条第1項第11号に規定するものをいう。）は、点検に便利で、かつ、火災等の災害による被害を受けるおそれが少ない箇所に設けること。ただし、水源の水位がポンプより低い位置にある加圧送水装置にあつては、消防法施行規則第12条第1項第3号の2の規定に従い、呼水装置を設けること。
3. スプリンクラー設備は、スプリンクラーヘッドの個数を同時に使用した場合に、それぞれの先端において、放水圧力が0.1MPa以上で、かつ、放水量が80L毎分以上で放水することができる性能のものとする。
4. スプリンクラー設備は、自動火災報知設備の感知器の作動又は火災感知用スプリンクラーヘッドの作動若しくは開放による圧力検知装置の作動と連動して加圧送水装置及び一斉開放弁を起動することができるものとする。
5. 一斉開放弁の二次側配管の部分には、放水することなく当該弁の作動を試験するための装置を設けること。

6. 制御弁は、消防法施行規則第14条第1項第3号の規定により設けること。
7. 流水検知装置は、湿式のものとし、消防法施行規則第14条第1項第4号の4及び第4号の5の規定により設けること。
8. 非常電源は、消防法施行規則第12条第1項第4号の規定により設けること。
9. 操作回路の配線は、消防法施行規則第12条第1項第5号の規定に準じて設けること。
10. 配管は、消防法施行規則第12条第1項第6号の規定に準じて設けること。
11. 貯水槽等には消防法施行規則第12条第1項第9号に規定する措置を講ずること。

施行規則第4条第1項第11号

十一 危険工室の窓及び扉は、次のイからハまでに定めるところによること。  
イ 危険工室の窓及び出口の扉は、非常の際に容易に避難できる構造とすること。  
ロ 危険工室の窓及び扉に用いる金具は、摩擦により火薬類が爆発し又は発火するおそれがない材質のものとすること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。  
ハ 危険工室の窓には、直射日光により火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置を講ずること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。

- 施行規則第4条第1項第11号イに規定する非常の際に容易に避難できる構造とは、次の基準によるものとする。
  1. 非常の際の避難に便利のように、できるだけ多くの窓及び出口を設けること。
  2. 出口の扉は外開きとすること。(積雪のため出口の扉を外開きにすることが非常の際の避難に不便な場合は、この限りでない。)
  3. 窓の扉は外開きとすること。(非常の際の避難に便利のように2箇所以上の適切な数の出口を設けた場合、又は、積雪のため窓の扉を外開きにすることが非常の際の避難に不便な場合は、この限りでない。)
- 施行規則第4条第1項第11号ロに規定する摩擦により火薬類が爆発し又は発火するおそれがない材質とは、直接鉄と摩擦する部分の材質を銅又は真鍮等とすることとする。
- 施行規則第4条第1項第11号ハに規定する直射日光により火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置とは、直射日光を受ける部分の窓に不透明のものを使用する又は日射調整フィルムを貼ることとする。

施行規則第4条第1項第12号

- 十二 危険工室の内面は、次のイからニまでに定めるところによること。
- イ 危険工室の内面には、内面の剥離及び内面の一部が火薬類に混入することを防止するための措置を講ずること。
- ロ 危険工室の内面には、飛散した火薬類の浸透又は浸入を防止するための措置及び飛散した火薬類を容易に除去できる措置を講ずること。ただし、火薬類が飛散するおそれがないときは、この限りでない。
- ハ 危険工室の床面には、火薬類が落下することにより爆発し又は発火することを防止するための措置を講ずること。ただし、火薬類が床面にこぼれ若しくは落下するおそれがないとき又は火薬類が落下することにより爆発し若しくは発火するおそれがないときは、この限りでない。
- ニ 危険工室の床面には、鉄類を表さないこと。

●施行規則第4条第1項第12号ロに規定する危険工室の内面の飛散した火薬類の浸透又は浸入を防止するための措置及び飛散した火薬類を容易に除去できる措置とは、内面は隙間のないようにし、かつ、水洗に耐え表面が滑らかであることとする。

●施行規則第4条第1項第12号ハに規定する危険工室の床面の火薬類が落下することにより爆発し又は発火することを防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 床材は、鉛板、ゴム板、ビニル床シート等の軟質材料であること。
2. 電気雷管の製造所又は信号炎管、信号火せん若しくは煙火の製造所にあつては、1.に加え、床材として木板を使用することができる。

施行規則第4条第1項第15号

十五 危険工室内に据付け又は備え付ける機械、器具又は容器は、次のイからニまでに定めるところによること。

イ 摩擦により火薬類が爆発し又は発火しない構造とすること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。

ロ 振動又は衝撃により火薬類が爆発し又は発火しない構造とすること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。

ハ 腐食により火薬類が変質し又は爆発し若しくは発火しない構造とすること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。

ニ 火薬類の付着、浸透又は浸入により火薬類が爆発し又は発火しない構造とすること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。

●施行規則第4条第1項第15号イに規定する摩擦により火薬類が爆発し又は発火しない構造とは、次の基準によるものとする。

1. 摩擦部は、作業上やむを得ない部分を除き、鉄と鉄との摩擦がないものが使用されていること。
2. すべての摩擦部には、十分に滑剤が塗布されていること。



施行規則第4条第1項第16号

十六 危険工室内に暖房設備を設ける場合は、火薬類の爆発又は発火を防止するための措置を講ずるとともに、燃焼しやすい物と隔離すること。

●施行規則第4条第1項第16号に規定する暖房設備の火薬類の爆発又は発火を防止するための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。

1. 危険工室内と完全に隔離した熱源で加熱された熱水又は水蒸気（ゲージ圧0.1MPa以下とする。）による放熱体を危険工室内に設置する。この場合、放熱体の熱面には、取り外しが可能で掃除ができる構造の適当な覆いを取り付けること。
2. 危険工室内と完全に隔離した熱源で加熱された熱風を危険工室内に送り込む。この場合、吹き出し口の温度は摂氏50度以下とし、熱源からの熱粉じんが吹き出し口から飛び込むおそれがあるときは、吹き出し口の前面に不燃性板等を設置して熱粉じんの飛び込みを防止すること。
3. 火薬類が飛散するおそれがない危険工室の場合はエアコンディショナを設置することができる。この場合、吹き出し口の温度は摂氏40度以下とし、室内機の電気配線は危険工室内に表さないこと。

施行規則第4条第1項第17号

十七 危険工室内におけるパラフィン槽には、パラフィンの過熱による火薬類の爆発又は発火を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第4条第1項第17号に規定するパラフィン槽のパラフィンの過熱による火薬類の爆発又は発火を防止するための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。
  1. パラフィン槽内のいずれの部分も摂氏120度を超えないように、温度測定装置を備えた安全装置を設置すること。
  2. パラフィンを外層の熱水により溶融させる方式の場合、自動給水器及び水が無くなったときの加熱遮断装置を備えること。

施行規則第4条第1項第18号

十八 危険工室又は火薬類一時置場を照明する設備には、漏電、可燃性ガス、粉じん等により火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置を講ずること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。

●施行規則第4条第1項第18号に規定する照明設備の漏電、可燃性ガス、粉じん等により火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。

1. 危険工室内又は一時置場内と完全に隔離した電灯及び電気配線とする。
2. 危険工室内又は一時置場内に設ける場合は、漏電、可燃性ガス、粉じん等に対して安全な防護装置を設けた電灯及び電気配線とする。

施行規則第4条第1項第21号

二十一 危険工室に面して設置された普通木造建築物には、耐火的措置を講ずること。

- 施行規則第4条第1項第21号に規定する普通木造建築物の耐火的措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。
  1. 木板が露出している箇所に防火塗料を塗布すること。
  2. 木板が露出している箇所を金属板等の不燃性物質で覆うこと。
  3. 危険工室との間に防火壁を設置すること。

施行規則第4条第1項第22号の2

二十二の二 硝化設備、乾燥設備その他特に温度の変化が起こる設備には、火薬類の温度変化による爆発又は発火を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第4条第1項第22号の2に規定する火薬類の温度変化による爆発又は発火を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。
  1. 設備の温度変化を適切に測定できる温度測定装置を設置すること。
  2. 設備の温度変化により火薬類が爆発し又は発火するおそれがあるときは、一定の範囲を超えて温度変化したときに熱源へのエネルギー供給を遮断、原料の供給を停止等の温度変化を抑えるための措置を講ずること。

施行規則第4条第1項第22号の3

二十二の三 火薬類又はその原料を加圧する設備には、火薬類又はその原料を過度に加圧することを防ぐための措置を講ずること。ただし、当該火薬類又はその原料が、加圧により爆発し又は発火するおそれがないときは、この限りでない。

●施行規則第4条第1項第22号の3に規定する火薬類又はその原料を過度に加圧することを防ぐための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。

1. 設備に、規定以上の圧力になれば自動的に減圧する安全装置を設けること。
2. 規定以上の圧力にはならない機構をもつ設備であること。

施行規則第4条第1項第22号の4

二十二の四 危険工室には、静電気により火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置を講ずること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。

●施行規則第4条第1項第22号の4に規定する静電気により火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 身体に帯電した静電気を除去するための設備を当該工室の入口に設けること。
2. 設備、装置、器具等は必要に応じて導電性のものを使用し、それらを接地すること。
3. 床及び作業台には、金属板、導電性マット（シート）等を敷設するか、導電性塗料を塗布する等の措置を講じ、かつ、それらを接地すること（雷薬又は滝剤の配合又は填薬を行う危険工室を除く。）。
4. 雷薬又は滝剤の配合又は填薬を行う危険工室の床及び作業台には、導電性マット（シート）を敷設し、かつ、接地すること。

(※) 静電気により火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置については、本基準の他に、施行規則第5条第1項第34号の基準についても留意すること。

施行規則第4条第1項第24号

二十四 火薬類を乾燥する工室内の加温装置には、乾燥中の火薬類が爆発し又は発火しないための措置を講ずること。

- 施行規則第4条第1項第24号に規定する乾燥中の火薬類が爆発し又は発火しないための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。
  1. 加温装置を乾燥中の火薬類と隔離して設置すること。
  2. 温水加温装置を用いて、その設定温度が乾燥温度とほぼ同一となるようにすること。



施行規則第4条第1項第24号の2

二十四の二 日乾場の乾燥台には、火薬類の落下による爆発又は発火を防止するための措置及び火薬類への砂じん等の混入を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第4条第1項第24号の2に規定する火薬類の落下による爆発又は発火を防止するための措置及び火薬類への砂じん等の混入を防止するための措置とは、乾燥台の高さを60cm程度とすることとする。

施行規則第4条第1項第25号

二十五 爆発試験場、燃焼試験場、発射試験場又は廃薬焼却場は、次のイからハまでに定めるところによること。

イ 危険区域内に設けること。

ロ 第三十一条に規定する土堤若しくは第三十一条の三に規定する防爆壁を設置すること又は防火壁の設置その他の延焼を遮断するための措置を講ずること。ただし、火薬類が爆発し又は発火することにより周辺の施設に危害を及ぼすおそれがないときは、この限りでない。

ハ 周囲の火災を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第4条第1項第25号ハに規定する周囲の火災を防止するための措置とは、爆発試験場、燃焼試験場、発射試験場又は廃薬焼却場の周囲の樹木、雑草等を伐採しておくこと又は周囲の樹木、雑草等に散水しておくこととする。

施行規則第4条第1項第27号

二十七 危険区域内で火薬類を運搬する運搬車は、運搬する火薬類その他周囲の火薬類の爆発又は発火を起こすおそれがないものであること。

- 施行規則第4条第1項第27号に規定する運搬する火薬類その他周囲の火薬類の爆発又は発火を起こすおそれがない運搬車とは、次のいずれかの基準に適合するものとする。
  1. 手押し車であって、運搬する火薬類に摩擦及び衝動を与えないような構造のもの。
  2. 蓄電池車であって、次の基準によるもの。
    - イ 運搬する火薬類に摩擦及び衝動を与えないように、荷台又は荷台と車軸との間には適当な緩衝装置を備えること。
    - ロ 蓄電池は、使用電圧が80V以下に保たれていること。
    - ハ 電気設備は、振動によって緩まないように固定され、適当な覆いがされていること。
    - ニ 電気配線は、配線相互間及び配線と車体間の絶縁が十分に保たれて定着されていること。
    - ホ 電気系統の短絡等による火花や火炎の発生がないよう常に点検及び整備がされていること。
    - ヘ 消火器が備えられていること。ただし、車両の構造上消火器を備えることができない場合であって、走行範囲の付近に直ちに使用できる消火器が備えられているときは、この限りでない。
  3. ディーゼル車又はガソリン車であって、次の基準によるもの。
    - イ 電気設備は、振動によって緩まないように固定され、適当な覆いがされていること。
    - ロ 電気配線は、配線相互間及び配線と車体間の絶縁が十分に保たれて定着されていること。
    - ハ 排気管及び消音器は、継目その他から排気の漏れがなく、運搬する火薬類その他周囲の火薬類からの距離が20cm未満の部分には適当な防熱措置が講じられていること。
    - ニ 排気管は、運搬する火薬類その他周囲の火薬類に影響を与えない位置において開口していること。
    - ホ 燃料やオイル漏れ、電気系統の短絡等による火花や火炎の発生がないよう常に点検及び整備がされていること。
    - ヘ 消火器が備えられていること。ただし、車両の構造上消火器を備えることができない場合であって、走行範囲の付近に直ちに使用できる消火器が備えられているときは、この限りでない。

施行規則第4条第1項第28号

二十八 火薬類の運搬通路の路面及び勾配は、火薬類を安全に運搬できるものであること。

- 施行規則第4条第1項第28号に規定する安全に運搬できる運搬通路とは、路面は平坦であり、地形上その他やむを得ない場合のほかは、勾配は50分の1以下とすることとする。

施行規則第4条第2項第11号

十一 不発弾等廃棄処理場は、次のイからハまでに定めるところによること。

イ 危険区域内に設けること。

ロ 第三十一条に規定する土堤若しくは第三十一条の三に規定する防爆壁を設置すること又は防火壁の設置その他の延焼を遮断するための措置を講ずること。ただし、火薬類が爆発し又は発火することにより周辺の施設に危害を及ぼすおそれがないときは、この限りでない。

ハ 周囲の火災を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第4条第2項第11号ハに規定する周囲の火災を防止するための措置とは、不発弾等廃棄処理場の周囲の樹木、雑草等を伐採しておくこと又は周囲の樹木、雑草等に散水しておくこととする。

施行規則第4条の2第1項第3号

三 移動区域の境界が森林内に設けられた場合には、火災による延焼を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第4条の2第1項第3号に規定する火災による延焼を防止するための措置とは、移動区域に隣接する森林と移動区域の境界線との間に幅2 m以上の防火のための空地を設けることとする。

(※) 森林から製造所に向けての火災、製造所から森林へ向けての火災を共に考慮する。

施行規則第4条の2第1項第18号

十八 移動式製造設備の移動は、製造し及び運搬する特定硝酸アンモニウム系爆薬並びに周囲の火薬類の爆発又は発火を起こすおそれがない構造の車両によることとし、製造のために車両の動力を使用する場合には、移動と製造とが同時にできない構造とし、製造のために車両の動力を使用しない場合には、製造のための動力は、特定硝酸アンモニウム系爆薬の爆発又は発火を起こすおそれがないものであること。

●施行規則第4条の2第1項第18号に規定する製造し及び運搬する特定硝酸アンモニウム系爆薬並びに周囲の火薬類の爆発又は発火を起こすおそれがない構造の車両とは、次の基準に適合するディーゼル車とする。

1. 電気設備は、振動によって緩まないように固定され、適当な覆いがされていること。
2. 電気配線は、配線相互間及び配線と車体間の絶縁が十分に保たれて定着されていること。
3. 排気管及び消音器は、継目その他から排気の漏れがなく、製造し及び運搬する特定硝酸アンモニウム系爆薬に対して適当な防熱措置が講じられていること。
4. 排気管は、製造し及び運搬する特定硝酸アンモニウム系爆薬並びに周囲の火薬類に影響を与えない位置において開口していること。

施行規則第4条の2第1項第19号

十九 移動式製造設備に据付け又は備え付ける機械、器具又は容器は、次のイからホまでに定めるところによること。

イ 摩擦により特定硝酸アンモニウム系爆薬が爆発し又は発火しない構造とすること。

ロ 振動又は衝撃により特定硝酸アンモニウム系爆薬が爆発し又は発火しない構造とすること。

ハ 腐食により特定硝酸アンモニウム系爆薬が変質し又は爆発し若しくは発火しない構造とすること。

ニ 特定硝酸アンモニウム系爆薬の付着、浸透又は浸入により爆発し又は発火しない構造とすること。

ホ 振動、衝撃等により変形しない構造とすること。

●施行規則第4条の2第1項第19号イに規定する摩擦により特定硝酸アンモニウム系爆薬が爆発し又は発火しない構造とは、次の基準によるものとする。

1. 摩擦部は、作業上やむを得ない部分を除き、鉄と鉄との摩擦がないものが使用されていること。
2. すべての摩擦部には、十分に滑剤が塗布されていること。



施行規則第4条の2第1項第29号

二十九 移動式製造設備で、特定硝酸アンモニウム系爆薬と直接触れる回転部は、摩擦により当該特定硝酸アンモニウム系爆薬が爆発し又は発火することを防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第4条の2第1項第29号に規定する摩擦により特定硝酸アンモニウム系爆薬が爆発し又は発火することを防止するための措置とは、特定硝酸アンモニウム系爆薬と直接触れる回転部が内壁と接触しないよう間隙をとることとする。

施行規則第4条の2第1項第31号

三十一 移動式製造設備のうち、特定硝酸アンモニウム系爆薬又はその原料を加圧する設備には、当該特定硝酸アンモニウム系爆薬又はその原料を過度に加圧することを防ぐための措置を講ずること。ただし、当該特定硝酸アンモニウム系爆薬又はその原料が、加圧により爆発し又は発火するおそれがないときは、この限りでない。

- 施行規則第4条の2第1項第31号に規定する特定硝酸アンモニウム系爆薬又はその原料を過度に加圧することを防ぐための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。
  1. 設備に、規定以上の圧力になれば自動的に減圧する安全装置を設けること。
  2. 規定以上の圧力にはならない機構をもつ設備であること。

施行規則第4条の2第1項第33号

三十三 廃薬焼却場は、次のイからハまでに定めるところによること。  
イ 移動区域内に設けること。  
ロ 第三十一条に規定する土堤若しくは第三十一条の三に規定する防爆壁を設置すること又は防火壁の設置その他の延焼を遮断するための措置を講ずること。ただし、火薬類が爆発することにより周辺の施設に危害を及ぼすおそれがないときは、この限りでない。  
ハ 周囲の火災を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第4条の2第1項第33号ハに規定する周囲の火災を防止するための措置とは、廃薬焼却場の周囲の樹木、雑草等を伐採しておくこと又は周囲の樹木、雑草等に散水しておくこととする。

施行規則第5条第1項第6号

六 工室又は火薬類一時置場は、鉄、砂れき、木片又はガラス片等の異物が混入することにより火薬類が変質し又は爆発し若しくは発火することを防止するための措置を講ずること。ただし、当該危害が発生するおそれがないときは、この限りでない。

●施行規則第5条第1項第6号に規定する異物が混入することにより火薬類が変質し又は爆発し若しくは発火することを防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 工室又は火薬類一時置場は、常に清潔に掃除すること。
2. 強風の場合には、砂じんの飛揚を防ぐため、必要に応じて工室又は火薬類一時置場の付近に散水すること。

施行規則第5条第1項第10号

十 火薬類の製造上特に温度に関係のある作業については、その温度の範囲を定め、その範囲内で作業すること。

- 施行規則第5条第1項第10号に規定する火薬類の製造上特に温度に関係のある作業のうち、冬期にニトログリセリンを扱う場合にあつては、これを凍結させないこととし、また、複数箇所における温度測定を行うなど適切な温度管理を行うとともに、危険予防の措置を講ずることとする。

施行規則第5条第1項第12号

十二 危険工室内で使用する機械、器具又は容器を修理する場合には、製造保安責任者の指示に従って、あらかじめ危険予防の措置を講ずること。

●施行規則第5条第1項第12号に規定する機械、器具又は容器を修理する場合の危険予防の措置とは、次の基準によるものとする。

1. 当該工室の外において、修理する機械等に付着又は浸透した火薬類を除去した後で修理に着手すること。
2. 当該工室の外で修理を行うことが困難である場合には、修理に着手する前に次の措置を講ずること。
  - イ 工室内の火薬類その他の危険物を安全な場所に移すこと。
  - ロ 修理する機械等に付着又は浸透した火薬類を除去すること。

施行規則第5条第1項第13号

十三 危険工室又は火薬類一時置場の改築又は修繕の工事をしようとするときは、製造保安責任者の指示に従つて、あらかじめ危険予防の措置を講ずること。

●施行規則第5条第1項第13号に規定する危険工室又は火薬類一時置場の改築又は修繕の工事をしようとするときの危険予防の措置とは、次の基準によるものとする。

1. 当該危険工室又は火薬類一時置場内の火薬類その他の危険物を安全な場所に移すこと。
2. 当該危険工室又は火薬類一時置場内の内面や機械等に付着又は浸透した火薬類を除去すること。

施行規則第5条第1項第15号

十五 火薬類の廃薬又は不良品は、危険予防及び盗難防止のための措置を講じた上で速やかに廃棄すること。

●施行規則第5条第1項第15号に規定する火薬類の廃薬又は不良品の廃棄における危険予防の措置とは、次の基準によるものとする。

1. 廃棄するまでの間、専用の廃薬容器に収納し及び移送すること。
2. あらかじめ定められた場所において、廃棄を行うこと。



施行規則第5条第1項第16号の2

十六の二 原動機をもつ車両は、火薬類の粉末が飛散し、又は可燃性ガスが発散するおそれがある工室及びその付近に入れないこと。ただし、飛散する火薬類又は発散する可燃性ガスの爆発又は発火を防止するための措置が講じられている場合は、この限りでない。

●施行規則第5条第1項第16号の2に規定する飛散する火薬類又は発散する可燃性ガスの爆発又は発火を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 工室又はその付近の当該車両が入る部分及びその周囲は、常に清掃し飛散した火薬類が存在しない状態とすること。
2. 工室又はその付近の当該車両が入る部分及びその周囲は、発散する可燃性ガスの濃度が爆発下限界の1/4以下である状態とすること。
3. 1. 又は2. の場合において、火薬類の粉末が飛散し、又は可燃性ガスが発散したときは、直ちに車両を停止させ、飛散した火薬類の粉末又は発散した可燃性ガスを除去するまで車両を動かさないこと。

施行規則第5条第1項第17号

十七 火薬類、油類等の付着しているおそれがある布類その他の廃材は、廃棄するまでの間、危険予防の措置を講ずること。

- 施行規則第5条第1項第17号に規定する火薬類、油類等の付着しているおそれがある布類その他の廃材についての危険予防の措置とは、一定の容器に収納し、毎日作業終了後工室外に搬出して、一定の場所で周囲に可燃物を置かないこととする。

施行規則第5条第1項第25号

二十五 火薬類一時置場に無煙火薬を存置する場合には、通気を確保するため当該火薬類一時置場の内壁及び床面に直に触れないような措置を講ずるとともに、荷崩れせず、安全に搬出入が可能な高さで積むこと。

●施行規則第5条第1項第25号に規定する通気を確保するために講ずる火薬類一時置場の内壁及び床面に直に触れない措置とは、次の基準によるものとする。

1. 無煙火薬を火薬類一時置場の内壁から30cm以上離すこと。
2. 無煙火薬は次のいずれかを使用して存置すること。
  - イ 枕木
  - ロ すのこ（木製又は樹脂製で鉄類が表面に表れていないもの）
  - ハ パレット（木製又は樹脂製で鉄類が表面に表れていないもの）
  - ニ 棚（木製又は樹脂製で鉄類が表面に表れていないもの）

●施行規則第5条第1項第25号に規定する無煙火薬が荷崩れせず、安全に搬出入が可能な高さで積むこととは、次の基準によるものとする。

1. 荷崩れによる落下を防ぐため平積みとすること。
2. 安全に搬出入するため、無煙火薬を積む高さは1.8m以下とすること。

施行規則第5条第1項第27号

二十七 毎日の製造作業終了後、工室内に火薬類を存置させないこと。やむを得ず存置する場合は、盗難を防止するための措置を講ずるとともに、必要に応じて爆発又は発火を防止するための措置を講ずること。

●施行規則第5条第1項第27号に規定する盗難を防止するための措置とは、見張りを行う等により盗難を防止することとする。なお、当該見張り等にロボット、センシング又はAI等のデジタル技術を活用する場合は、次に示す効果が得られるものであること。

1. 火薬類を存置する工室付近の異常の有無を監視し、必要に応じ警告することができるもの。
2. 緊急時に必要な通報を速やかに行うことができるもの。

(※) デジタル技術の活用により火薬類が爆発し、又は発火するおそれがないよう適切な措置を講ずること。

●施行規則第5条第1項第27号に規定するやむを得ず火薬類を存置する場合の爆発又は発火を防止するための措置について、やむを得ずニトログリセリンを存置する場合の措置とは、その存置量を最小化しておくとともに、冬期に存置する場合は凍結防止の措置を講ずることとする。

施行規則第5条第1項第34号

三十四 静電気により爆発し又は発火するおそれがある火薬類を取り扱う際には、帯電した静電気を有効に除去するための措置を講ずること。

●施行規則第5条第1項第34号に規定する帯電した静電気を有効に除去するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 衣類、履物及び必要に応じ手袋は、静電気の帯電を防止するものを着用すること（雷薬又は滝剤の配合又は填薬作業を行う場合を除く。）。

2. 雷薬又は滝剤の配合又は填薬作業を行う際には、次の措置を講ずること。

イ 衣類は、静電気の帯電を防止するものを着用すること。

ロ 履物及び手袋は導電性のものを着用すること。

ハ ふるい、たらい及び小分け用スコップは導電性のもの（鉄製のものを除く。）を使用すること。

(※) 静電気により火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置については、本基準の他に、施行規則第4条第1項第22号の4の基準にも留意すること。

施行規則第5条の2第1項第8号

八 移動式製造設備には、鉄、砂れき、木片又はガラス片等の異物が特定硝酸アンモニウム系爆薬に混入することを防止するための措置を講ずること。

●施行規則第5条の2第1項第8号に規定する異物が特定硝酸アンモニウム系爆薬に混入することを防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 移動式製造設備は、常に清潔に掃除すること。
2. 強風の場合には、砂じんの飛揚を防ぐため、必要に応じて移動式製造設備の付近に散水すること。

施行規則第5条の2第1項第13号

十三 移動式製造設備を改造、修繕又は修理する場合には、製造保安責任者の指示に従って、あらかじめ危険予防の措置を講ずること。

- 施行規則第5条の2第1項第13号に規定する移動式製造設備を改造、修繕又は修理する場合の危険予防の措置とは、次の基準によるものとする。
  1. 移動式製造設備内の特定硝酸アンモニウム系爆薬その他の危険物を安全な場所に移すこと。
  2. 移動式製造設備に付着した特定硝酸アンモニウム系爆薬を除去すること。

施行規則第5条の2第1項第16号

十六 特定硝酸アンモニウム系爆薬の廃棄又は不良品は、危険予防及び盗難防止のための措置を講じた上で、速やかに廃棄すること。

- 施行規則第5条の2第1項第16号に規定する特定硝酸アンモニウム系爆薬の廃棄又は不良品の廃棄における危険予防の措置とは、次の基準によるものとする。
  1. 廃棄するまでの間、専用の廃棄容器に収納し及び移送すること。
  2. あらかじめ定められた場所において、廃棄を行うこと。



施行規則第5条の2第1項第17号

十七 特定硝酸アンモニウム系爆薬、油類等の付着しているおそれがある布類その他の廃材は、廃棄するまでの間、危険予防の措置を講ずること。

- 施行規則第5条の2第1項第17号に規定する特定硝酸アンモニウム系爆薬、油類等の付着しているおそれがある布類その他の廃材についての危険予防の措置とは、一定の容器に収納し、毎日作業終了後一定の場所で周囲に可燃物を置かないこととする。

施行規則第5条の2第1項第19号

十九 毎日の製造及び消費作業終了後、移動式製造設備に特定硝酸アンモニウム系爆薬を  
存置させないこと。やむを得ず存置する場合は、盗難を防止するための措置を講ずるとと  
もに、必要に応じて安全な措置を講ずること。

- 施行規則第5条の2第1項第19号に規定する盗難を防止するための措置とは、見張り  
を行う等により盗難を防止することとする。なお、当該見張り等にロボット、センシング  
又はA I等のデジタル技術を活用する場合は、次に示す効果が得られるものであること。
  1. 火薬類を存置する設備付近の異常の有無を監視し、必要に応じ警告することができる  
もの。
  2. 緊急時に必要な通報を速やかに行うことができるもの。(※) デジタル技術の活用により火薬類が爆発し、又は発火するおそれがないよう適切な措  
置を講ずること。

施行規則第8条第1項第1号の3

一の三 工室等内の設備のうち、照明設備の変更の工事（発光ダイオード（LED）を用いた電灯への変更の工事に限る。）であって、当該変更の工事の際火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置を講じたもの

- 施行規則第8条第1項第1号の3に規定する火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置とは、工事の際火薬類の製造や存置を行わないこととする。

火薬類取締法施行規則関係例示基準（貯蔵）

この火薬類取締法施行規則関係例示基準（以下「例示基準」という。）は、火薬類取締法施行規則（昭和 25 年 10 月 31 日通商産業省令第 88 号。以下「施行規則」という。）に定める技術的要件を満たす技術的内容をできるだけ具体的に示したものである。

なお、施行規則に定める技術的要件を満たすものと認められる技術的内容はこの例示基準に限定されるものではなく、施行規則に照らして十分な保安水準の確保が達成できる技術的根拠があれば、施行規則に適合するものと判断するものである。

施行規則第14条第1項第1号

一 火薬庫内の設備のうち、次のいずれかに該当するものの取替えの工事であって、当該取替えの工事の際火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置を講じたもの

イ 暖房設備

ロ 照明設備

ハ 建築材料

●施行規則第14条第1項第1号に規定する火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 工事の際火薬類の貯蔵を行わないこと。ただし、貯蔵する火薬類が飛散するおそれがない場合であって、必要な工事の際、貯蔵する火薬類に覆いをする等火薬類が爆発し又は発火しないような措置を講じている場合については、この限りでない。

2. 工事の際見張人を配置すること。

3. 工事をする者は、貯蔵貨物が火薬類であることを認識し、危害予防に必要な注意を払うこと。

施行規則第14条第1項第1号の2

- 一の二 火薬庫内の設備のうち、次のいずれかに該当するものの変更の工事であって、当該変更の工事の際火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置を講じたもの
- イ 照明設備（発光ダイオード（LED）を用いた電灯への変更の工事に限る。）
  - ロ 警鳴装置（感知部の変更の工事に限る。）

●施行規則第14条第1項第1号の2に規定する火薬類が爆発し又は発火することを防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 工事の際火薬類の貯蔵を行わないこと。ただし、貯蔵する火薬類が飛散するおそれがない場合であって、必要な工事に際し、貯蔵する火薬類に覆いをする等火薬類が爆発し又は発火しないような措置を講じている場合については、この限りでない。
2. 工事の際見張人を配置すること。
3. 工事をする者は、貯蔵貨物が火薬類であることを認識し、危害予防に必要な注意を払うこと。
4. 警鳴装置の感知部の工事については、電気工事士（電気工事士法（昭和35年法律第139号）第2条第4項に規定する電気工事士）の資格を有する者により行うこと。

施行規則第16条第2号

- 二 前条第一項の表(6)(イ)の規定によりがん具煙火を貯蔵する場合にあっては、次のイからニまでに定めるところによること。
- イ がん具煙火を貯蔵する場所の周囲の壁及び天井並びに建築物の二階以上に設ける場合にあつては、床は、厚さ十センチメートル以上の鉄筋コンクリート造又は厚さ十九センチメートル以上の補強コンクリートブロック造とすること。
- ロ がん具煙火を貯蔵する場所の入口の扉は、防火扉とし、盗難を防止するための措置を講ずること。
- ハ がん具煙火を貯蔵する場所には、窓、通気孔及び換気孔は、設けないこと。
- ニ がん具煙火を貯蔵する場所には、自動消火設備を設けること。

●施行規則第16条第2号ロに規定する入口の扉に講ずる盗難を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 扉は、厚さ0.6mm以上の鉄板を使用した扉とすること。
2. 扉に錠を使用すること。

施行規則第16条第3号

三 前条第一項の表(1)(イ)又は(5)の規定により火薬類を建築物(坑道その他建築物以外の施設を含む。以下この号において同じ。)に貯蔵する場合(ローブ発射用ロケット、信号炎管、信号火せん及び煙火を貯蔵する場合を除く。)にあつては、次のイからトまでに定めるところによること。

イ 建築物の構造は、鉄筋コンクリート造、コンクリートブロック造又はこれらと同等程度に盗難及び火災を防止するための措置を講じたものとする。

ロ 建築物の入口の扉は、防火扉とし、盗難を防止するための措置を講ずること。

ハ 建築物の屋根には、火災を防止するための措置を講じ、天井裏又は屋根には、盗難を防止するための措置を講ずること。

ニ 建築物の内面には、火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦を緩和する建築材料を使用すること。ただし、火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦により当該火薬類が爆発し、又は発火するおそれがないときは、この限りでない。

ホ 建築物の床面には、できるだけ鉄類を表さないこと。

ヘ 建築物には、盗難を防止するための自動警報装置を設置すること。

ト 建築物には、帳簿を備え、責任者を定めて、出納した火薬類の種類及び数量並びに出納の年月日並びに相手方の住所及び氏名をその都度明確に記録させること。

●施行規則第16条第3号ロに規定する入口の扉に講ずる盗難を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 扉は、次のいずれかの基準によること。

イ 日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.1.2 外扉の基準に適合し、厚さ2mm以上の鉄板を使用した扉

ロ 厚さ1mm以上の鉄板を張ったコンクリート製のもので、厚さ5cm以上の扉

ハ 厚さ0.5mm以上の鉄板を両面に張ったコンクリート製のもので、厚さ5cm以上の扉

2. 日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.2 火薬庫に用いる錠の基準に適合する錠を使用すること。

●施行規則第16条第3号ハに規定する屋根に講ずる火災を防止するための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。

1. 屋根の外表面は、金属板、スレート板、瓦その他の不燃性物質を使用すること。

2. 鉄筋コンクリート造、コンクリートブロック造又は側面の壁に緊結させた厚さ2mm以上の鉄板を使用した屋根とすること。



- 施行規則第16条第3号ハに規定する天井裏又は屋根に講ずる盗難を防止するための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。
  1. 天井裏又は屋根に、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.3 火薬庫の天井裏又は屋根に張る金網の基準に適合する金網を設置すること。
  2. 鉄筋コンクリート造、コンクリートブロック造又は側面の壁に緊結させた厚さ2mm以上の鉄板を使用した屋根とすること。
  
- 施行規則第16条第3号ニに規定する建築物の内面に使用する火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦を緩和する建築材料とは、木板とする。
  
- 施行規則第16条第3号ヘに規定する盗難を防止するための自動警報装置を設置することとは、次の基準によるものとする。
  1. 自動警報装置は、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.4 火薬庫及び庫外貯蔵所に用いる自動警報装置の基準に適合する自動警報装置(装置が作動した場合に当該建築物を管理すべき者が警報を感知することが通常困難であると認められる場所に設置されている建築物にあつては、警鳴装置に限る。)とすること。
  2. 自動警報装置は、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.4.3 自動警報装置の管理に関する基準に適合する方法で、定期的にその機能を点検し、作動するよう維持すること。ただし、自動警報装置の機能及び作動状況を常時監視し、又はロボット、センシング若しくはAI等のデジタル技術を活用することにより常に確認している場合にあつては、定期的な点検を要しない。(※) デジタル技術の活用により火薬類が爆発し、又は発火するおそれがないよう適切な措置を講ずること。

## 施行規則第16条第3号の2

三の二 前条第一項の表（1）（ハ）の規定により火薬類を建築物に貯蔵する場合にあっては、前号へ及びトの規定によるほか、次のイからハマまでに定めるところによること。

イ 建築物の構造は、幅、奥行き及び高さが二・三メートル以上の鉄筋コンクリート造とし、厚さは十センチメートル以上とすること。

ロ 建築物の入口の扉は、内開きの防火扉とし、盗難を防止するための措置を講ずること。

ハ 建築物内に爆薬、工業雷管又は電気雷管を貯蔵する場合にあっては、当該爆薬、工業雷管又は電気雷管の一部が爆発したときに当該建築物内に貯蔵する他の爆薬が爆発することを防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第16条第3号の2ロに規定する入口の扉に講ずる盗難を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。
  1. 扉は、厚さ4.5mm以上の鉄板を使用した扉とすること。
  2. 日本産業規格K4832（2018）火薬類の盗難防止設備の要求事項3.2 火薬庫に用いる錠の基準に適合する錠を使用すること。
  
- 施行規則第16条第3号の2ハに規定する爆薬の一部が爆発したときに建築物内に貯蔵する他の爆薬が爆発することを防止するための措置とは、次の基準によるものとする。
  1. 爆薬を収納する十分な強度を有する木箱（以下「収納箱」という。）を設置し、その中に爆薬を入れる個装容器を取り付け、収納箱と個装容器との間隔は30cm以上とし、個装容器相互間の間隔は15cm以上とし、空間には砂を密に充填し、これを維持すること。なお、収納箱には、砂を充填したとき変形しないよう補強するとともに、転倒防止の適当な措置を講ずること。
  2. 爆薬を入れる個装容器は、合成樹脂製の外筒と内筒からなり、外筒は内筒が挿入できる径とし、内筒は内径30mm以下で爆薬を収納する部分と砂を充填する部分とに分かれ、爆薬を収納する部分の前後には厚さ15cm以上に砂を密に充填し、これを維持すること。
  3. 個装容器1個に貯蔵できる爆薬は、100g以下とすること。
  
- 施行規則第16条第3号の2ハに規定する工業雷管又は電気雷管の一部が爆発したときに建築物内に貯蔵する他の爆薬が爆発することを防止するための措置とは、工業雷管又は電気雷管を収納する十分な強度を有する木箱（以下「雷管収納箱」という。）を設置し、その中に工業雷管又は電気雷管を入れる木製の貯蔵箱1個を取り付け、雷管収納箱と貯蔵箱との間隔は15cm以上とし、空間には砂を密に充填し、これを維持することとする。

#### 施行規則第16条第4号

四 前条第一項の表（1）（イ）又は（5）の規定により火薬類を金属製のロッカーその他の堅固な構造を有する設備（以下この号及び次号において「設備」という。）に収納して建築物に貯蔵する場合（ロープ発射用ロケット、信号炎管、信号火せん及び煙火を貯蔵する場合を除く。）にあつては、第三号の規定にかかわらず、次のイからホまでに定めるところによること。

イ 設備の扉には、盗難を防止するための措置を講ずること。

ロ 設備は、容易に持ち運びできないこと。

ハ 設備の内面には、火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦を緩和する材料を使用すること。

ニ 設備には、盗難を防止するための自動警報装置を設置すること。

ホ 設備には、帳簿を備え、責任者を定めて、出納した火薬類の種類及び数量並びに出納の年月日並びに相手方の住所及び氏名をその都度明確に記録させること。

●施行規則第16条第4号イに規定する設備の扉に講ずる盗難を防止するための措置とは、扉に錠を使用することとする。

(※) 施行規則第16条第4号の2により本例示基準を準用する場合は、本例示基準によるほか、次の基準によるものとする。

・扉に厚さ1.6mm以上の鋼板を使用すること。

●施行規則第16条第4号ハに規定する火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦を緩和する材料とは、次のいずれかとする。

1. 木板
2. 導電性のゴム板
3. 導電性のビニルシート

●施行規則第16条第4号ニに規定する盗難を防止するための自動警報装置を設置することとは、次の基準によるものとする。

1. 自動警報装置は、日本産業規格K4832（2018）火薬類の盗難防止設備の要求事項3.4 火薬庫及び庫外貯蔵所に用いる自動警報装置の基準に適合する自動警報装置（装置が作動した場合に当該設備を管理すべき者が警報を感知することが通常困難であると認められる場所に設置されている設備にあつては、警鳴装置に限る。）とすること。
2. 自動警報装置は、日本産業規格K4832（2018）火薬類の盗難防止設備の要求事項3.4.3 自動警報装置の管理に関する基準に適合する方法で、定期的にその機能を点検し、作動するよう維持すること。ただし、自動警報装置の機能及び作動状況を

常時監視し、又はロボット、センシング若しくはA I等のデジタル技術を活用することにより常に確認している場合にあっては、定期的な点検を要しない。

(※) デジタル技術の活用により火薬類が爆発し、又は発火するおそれがないよう適切な措置を講ずること。

#### 施行規則第16条第4号の2

四の二 前条第一項の表（1）（ロ）及び（2）から（4）までの規定により火薬類を貯蔵する場合にあっては、前号イからホまでの規定によるほか、次のイからニまでに定めるところによること。

イ 火薬類は、設備に収納して建築物に貯蔵すること。

ロ 設備は、盗難を防止するための措置を講じた金属製のロッカー又はこれと同等程度に盗難を防止するための措置を講じた堅固な構造を有するものとする。

ハ 設備内に棚を設ける場合にあっては、棚は、落下を防止するための措置を講じた堅固な構造とし、その表面には、火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦を緩和する材料を使用すること。

ニ 設備には、火薬類が爆発し、又は発火したときに発生するガスを排出するために適当な排気孔を設け、排気孔には、盗難を防止するための措置を講ずること。ただし、耐火性のロッカー等については、この限りでない。

- 施行規則第16条第4号の2ロに規定する盗難を防止するための措置を講じた金属製のロッカーとは、外壁を厚さ1.2mm以上の鋼板とし、かつ、適切な補強を施したものとす。
- 施行規則第16条第4号の2ハに規定する棚の堅固な構造とは、厚さ1.2mm以上の鋼板とし、棚の落下を防止するための措置とは、棚を溶接等で内壁に4箇所以上固定することとする。
- 施行規則第16条第4号の2ハに規定する火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦を緩和する材料とは、次のいずれかとする。
  1. 木板
  2. 導電性のゴム板
  3. 導電性のビニルシート
- 施行規則第16条第4号の2ニに規定するガスを排出するために適当な排気孔を設けることとは、直径50mm以上の排気孔を2箇所以上設けることとする。
- 施行規則第16条第4号の2ニに規定するガスの排気孔に講ずる盗難を防止するための措置とは、火薬類が爆発し、又は発火したときに発生したガスを排出できるよう、摂氏約200度で溶融する金属を用いて排気孔を塞ぐこととする。

施行規則第16条第5号

五 前条第一項の表（8）の規定により火薬類を貯蔵する場合（ロープ発射用ロケット、信号雷管、信号炎管、信号火せん及び煙火を貯蔵する場合を除く。）にあつては、堅固な設備に収納し、盗難を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第16条第5号に規定する盗難を防止するための措置とは、設備の扉に錠を使用することとする。

施行規則第21条第1項第8号

八 火薬類を収納した容器包装は、通気を確保するため火薬庫の内壁及び床面に直に触れない措置を講ずること。ただし、火薬類が温度及び湿度の影響を受けない場合にあつては、通気を確保するため火薬庫の床面に直に触れない措置については、この限りでない。

●施行規則第21条第1項第8号に規定する火薬類を収納した容器包装が通気を確保するため火薬庫の内壁及び床面に直に触れない措置とは、次の基準によるものとする。

1. 火薬類を収納した容器包装を火薬庫の内壁から30cm以上離すこと。
2. 火薬類を収納した容器包装が床面に直に触れないようにするため、次のいずれかを火薬庫の床面に設置すること。

イ 枕木

ロ すのこ（木製又は樹脂製で鉄類が表面に表れていないもの）

ハ パレット（木製又は樹脂製で鉄類が表面に表れていないもの）

ニ 置台（木製若しくは樹脂製で鉄類が表面に表れていないもの、又は金属製で、金属製器具等が衝突しても火花が発生しないように塗装、コーティング等の処理が施されているもの）

施行規則第21条第1項第8号の2

八の二 火薬類を収納した容器包装は、荷崩れせず、安全な搬出入が可能な高さで積むこと。

●施行規則第21条第1項第8号の2に規定する火薬類を収納した容器包装は、荷崩れせず、安全な搬出入が可能な高さで積むこととは、次の基準によるものとする。

1. 荷崩れによる落下を防ぐため、平積みとすること。
2. 安全に搬出入するため、次のいずれかによること。

イ 積む高さは1.8m以下とすること。

ロ チェーンブロック、天井クレーン、ローラコンベアその他の搬出入作業に用いられる器具であって火薬類に摩擦又は衝動を与えないような構造のもの及び施行規則第4条第1項第27号の運搬車により搬出入作業を行う場合にあつては、積む高さは4m以下とすること。



施行規則第21条第1項第11号

十一 ダイナマイトの貯蔵中薬包からニトログリセリンが滲出して外装容器の面又は床上を汚染したときは、当該ニトログリセリンを分解して除去すること。

- 施行規則第21条第1項第11号に規定するニトログリセリンを分解して除去する方法とは、苛性ソーダのアルコール溶液（苛性ソーダ100gを水150mLに溶解し、これにアルコール1Lを混入したもの）を注いでニトログリセリンを分解し、布片で拭き取ることとする。

施行規則第21条第1項第14号

十四 火薬庫に設置してある警鳴装置については、その機能を点検し、作動するよう維持すること。

- 施行規則第21条第1項第14号に規定するその機能を点検し、作動するよう維持することとは、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.4.3 自動警報装置の管理に関する基準に適合する方法で、定期的にその機能を点検し、作動するよう維持することとする。ただし、自動警報装置の機能及び作動状況を常時監視し、又はロボット、センシング若しくはAI等のデジタル技術を活用することにより常に確認している場合にあつては、定期的な点検を要しない。
- (※) デジタル技術の活用により火薬類が爆発し、又は発火するおそれがないよう適切な措置を講ずること。

施行規則第24条第4号

四 火薬庫の入口の扉は、外扉が耐火扉である二重扉とし、盗難を防止するための措置を講ずること。

●施行規則第24条第4号に規定する入口の扉に講ずる盗難を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 内扉は、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.

1. 1 内扉の基準に適合すること。

2. 外扉は次の基準によること。

イ 厚さ3mm以上の鉄板とすること。

ロ 日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3. 1. 2  
外扉の基準に適合すること。

3. 内扉及び外扉にはそれぞれ錠を使用すること。

4. 外扉の錠は、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項  
3. 2 火薬庫に用いる錠の基準に適合すること。

(※) 施行規則第26条第1項により本例示基準を準用する場合は、「厚さ3mm以上」とあるのは「厚さ2mm以上」と読み替えるものとする。

(※) 施行規則第28条により本例示基準を準用する場合は、「厚さ3mm以上の鉄板とする」とあるのは「厚さ3mm以上の鉄板とし、かつ、適当に補強する」と読み替えるものとし、1.、2. ロ及び4. については適用しない。

施行規則第24条第5号

五 火薬庫に窓を設ける場合にあつては、その数は火薬庫の大きさに応じ採光を考慮して定め、直射日光により火薬類が変質し、又は爆発し、若しくは発火することを防止するための措置を講ずるとともに、盗難及び火災を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第24条第5号に規定する窓に講ずる直射日光により火薬類が変質し、又は爆発し、若しくは発火することを防止するための措置とは、内方の窓に不透明なものを使用するか、日射調整フィルムを貼ることとする。
- 施行規則第24条第5号に規定する窓に講ずる盗難及び火災を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。
  1. 地盤面から1.7m以上の高さとすること。
  2. 10cm以下の間隔で直径1cm以上の鉄棒をはめ込むこと。
  3. 外方には外から容易に開くことのできないような防火扉を備えること。

施行規則第24条第6号

六 火薬庫の床には、地盤面からの湿気を防止するための措置を講ずること。ただし、火薬類が湿気により変質するおそれがないときは、この限りでない。

●施行規則第24条第6号に規定する床に講ずる地盤面からの湿気を防止するための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。

1. 床と地盤面の間に空間を設け、床の高さは地盤面から30cm以上とし、2個以上の適切な数の通気孔を設ける。この場合、通気孔には金網を張り、幅20cm以上の通気孔には、直径1cm以上の鉄棒を約5cm間隔ではめ込むとともに、小動物の侵入防止に配慮すること。
2. 床と地盤面の間に、地盤面からの湿気を防ぐことができる防湿フィルムを敷設すること。
3. 床面に、地盤面からの湿気を防ぐことができる防湿塗料を塗布すること。

(※) 施行規則第28条により本例示基準を準用する場合は、「床の高さは地盤面から30cm以上」は適用しない。

施行規則第24条第7号

七 火薬庫の内面には、火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦を緩和する建築材料を使用すること。ただし、火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦により当該火薬類が爆発し、又は発火するおそれがないときは、この限りでない。

- 施行規則第24条第7号に規定する内面に使用する火薬類の落下、衝突その他これらに類する事象による衝撃又は摩擦を緩和する建築材料とは、木板とする。

施行規則第24条第8号

八 火薬庫の換気孔は、火薬庫内の温度及び湿度の変化を少なくするように適切に設置するとともに、盗難を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第24条第8号に規定する火薬庫内の温度及び湿度の変化を少なくするように換気孔を適切に設置することとは、火薬庫の大きさに応じ、天井に1個以上の換気孔を設け、かつ、天井裏から外部に通ずるように両妻に各1個以上の換気孔を設けることとする。  
(※) 施行規則第24条の2により本例示基準を準用する場合は、「天井裏から外部に通ずるように両妻に各1個以上の換気孔を設けること」は適用しない。
- 施行規則第24条第8号に規定する換気孔に講ずる盗難を防止するための措置とは、金網を張ることとする。

施行規則第24条第9号

九 火薬庫に暖房設備を設ける場合にあつては、暖房設備により火薬類が爆発し、又は発火することを防止するための措置を講ずるとともに、暖房設備を燃焼しやすい物と隔離すること。

●施行規則第24条第9号に規定する暖房設備により火薬類が爆発し、又は発火することを防止するための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。

1. 火薬庫と完全に隔離した熱源で加熱された熱水又は水蒸気（ゲージ圧0.1MPa以下とする。）による放熱体を火薬庫内に設置すること。この場合において、放熱体の熱面には、取り外しが可能で掃除ができる構造の適当な覆いを取り付けること。
2. 火薬庫と完全に隔離した熱源で加熱された熱風を火薬庫内に送り込むこと。この場合において、吹き出し口の温度は摂氏50度以下とし、熱源からの熱粉じんが吹き出し口から飛び込むおそれがあるときは、吹き出し口の前面に不燃性板等を設置して熱粉じんの飛び込みを防止すること。
3. 火薬類が飛散するおそれがない火薬庫でエアコンディショナを設置する場合には、エアコンディショナの室内機の吹き出し口の温度は摂氏40度以下とし、火薬庫の内面にはエアコンディショナの室内機の電気配線を表さないこと。



施行規則第24条第10号

十 火薬庫内に照明設備を設ける場合にあつては、照明設備により火薬類が爆発し、又は発火することを防止するための措置を講ずること。

●施行規則第24条第10号に規定する照明設備により火薬類が爆発し、又は発火することを防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 防爆式の電灯を用いること。
2. 配線は、金属線び工事、金属管工事、がい装ケーブルを使用するケーブル工事等によること。
3. 自動遮断器又は開閉器は、火薬庫外に設けること。

施行規則第24条第11号

十一 火薬庫の屋根の外面には、火薬類の爆発の際軽量の飛散物となる不燃性物質を使用し、盗難及び火災を防止するための措置を講ずるとともに、小屋組を設ける場合にあつては、火薬類の爆発の際軽量の飛散物となる建築材料を使用すること。

●施行規則第24条第11号に規定する屋根の外面に使用する火薬類の爆発の際軽量の飛散物となる不燃性物質とは、次のいずれかとする。

1. 金属板
2. スレート板
3. 瓦

(※) 施行規則第27条第1項により本例示基準を準用する場合は、本例示基準によるほか、次の基準のいずれかによるものとする。

- ・鉄網セメントモルタル

●施行規則第24条第11号に規定する小屋組を設ける場合に使用する火薬類の爆発の際軽量の飛散物となる建築材料とは、木材とする。

(※) 施行規則第26条第1項により本例示基準を準用する場合は、「木材」とあるのは「木材又は軽量形鋼」と読み替えるものとする。

施行規則第24条第14号

十四 火薬庫の付近には、防火のための措置及び消火の活動のために必要な措置を講ずるとともに、警戒札その他の警戒設備を設けること。

●施行規則第24条第14号に規定する防火のための措置及び消火の活動のために必要な措置とは、次の基準によるものとする。

1. 火薬庫の境界の外側に幅2m以上の防火のための空地を設けること。
2. 火薬庫付近には、貯水池、貯水槽、消火栓等の消火の設備を設けること。

施行規則第24条第15号

十五 火薬庫の天井裏又は屋根には、盗難を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第24条第15号に規定する天井裏又は屋根に講ずる盗難を防止するための措置とは、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.3 火薬庫の天井裏又は屋根に張る金網の基準に適合する金網を設置することとする。

施行規則第24条第16号

十六 前各号に掲げるもののほか、火薬庫には、盗難を防止するための措置を講ずること。

●施行規則第24条第16号に規定する盗難を防止するための措置とは、次のいずれかの基準によるものとする。

1. 日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.4 火薬庫及び庫外貯蔵所に用いる自動警報装置の基準に適合する警鳴装置を設置すること。
2. 見張所等を設置し、見張人等を常時配置すること。

(※) なお、デジタル技術の活用により火薬類が爆発し、又は発火するおそれがないよう適切な措置を講ずること。

施行規則第24条の2第5号

五 火薬庫の覆土は、石塊を含まないものとし、その表面には、できるだけ覆土の崩壊を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第24条の2第5号に規定する覆土の崩壊を防止するための措置とは、覆土の表面を芝草類で被覆することとする。

施行規則第25条第4号

四 火薬庫の入口及び火薬庫に通ずるトンネルの入口には、鉄扉を設け、盗難を防止するための措置を講ずること。

●施行規則第25条第4号に規定する盗難を防止するための措置とは、次の基準によるものとする。

1. 火薬庫の入口の扉は、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.1.2 外扉の基準に適合すること。
2. 火薬庫の入口及び火薬庫に通ずるトンネルの入口には、日本産業規格K4832(2018)火薬類の盗難防止設備の要求事項3.2 火薬庫に用いる錠の基準に適合する錠をそれぞれ設置すること。

施行規則第25条の2第7号

七 第四号の放爆用トンネルは、次のイからニまでに定めるところによること。

イ 一の火薬庫について一箇所とし、鉛直に設置すること。

ロ 放爆用トンネルの地上の開口部は、雨水の浸入及び火災を防止するために、火薬類の爆発の際軽量の飛散物となる不燃性物質で覆うこと。

ハ 放爆用トンネルの地上の開口部上面には、盗難を防止するための措置を講ずること。

ニ 放爆用トンネルの断面の形状は円形又は正方形とし、火薬庫の貯蔵量に応じて、次の表の断面積とすること。

- 施行規則第25条の2第7号ロに規定する放爆用トンネルの地上の開口部を覆う、火薬類の爆発の際軽量の飛散物となる不燃性物質とは、スレート板又は金属板とする。
- 施行規則第25条の2第7号ハに規定する放爆用トンネルの地上の開口部上面に講ずる盗難を防止するための措置とは、金網を張ることとする。



施行規則第27条第1項第4号

四 火薬庫の入口は、付近の保安物件に対し、危険のおそれがない側に設け、かつ、火薬庫の付近には、消火の活動のために必要な措置を講ずること。

- 施行規則第27条第1項第4号に規定する火薬庫の付近に講ずる消火の活動のために必要な措置とは、貯水槽、消火栓等の消火の設備を設けることとする。

施行規則第27条の2第2号

二 火薬庫の屋根には、盗難及び火災を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第27条の2第2号に規定する盗難及び火災を防止するための措置とは、屋根を鉄網セメントモルタル仕上げとすることとする。

施行規則第27条の2第4号

四 火薬庫には、水があふれ出ることにより火薬類が流失することを防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第27条の2第4号に規定する水があふれ出ることにより火薬類が流失することを防止するための措置とは、あふれ出る水の流出口を設け、流出口に沈殿槽を設置することとする。

施行規則第29条第2号

二 がん具煙火貯蔵庫又は導火線庫の入口の扉には、盗難を防止するための措置を講ずること。

- 施行規則第29条第2号に規定する入口の扉に講ずる盗難を防止するための措置とは、扉に錠を使用することとする。

施行規則第31条第4号

四 土堤の勾配は、四十五度より急でない勾配とすること。ただし、土堤の内面を補強し崩壊を防止するための措置を講じる場合にあっては、その内面を九十度より急でない勾配とすることができる。

- 施行規則第31条第4号に規定する土堤の内面を補強し崩壊を防止するための措置とは、土堤の材料に施行規則第31条第5号の例示基準に示すものを使用するほか、必要に応じ、土堤の内面を鉄筋コンクリートで補強することとする。

#### 施行規則第31条第4号の4

四の四 第四号ただし書の土堤の内面を補強し崩壊を防止するための措置として、その内面を鉄筋コンクリートで補強する場合にあっては、当該補強部分の高さは土堤の高さの二分の一以下とし、かつ、前号の規定にかかわらず、土堤の頂部の厚さは一メートルに鉄筋コンクリートの厚さを加えた厚さ以上とすること（最大貯蔵量爆薬六百キログラム以下の火薬庫であって、土堤の内面を七十五度より急でない勾配とする場合を除く。）。

- 施行規則第31条第4号の4に規定する土堤の内面を鉄筋コンクリートで補強する場合については、当該鉄筋コンクリートの厚さを40cm以下とし、土堤の強度に合わせてなるべく薄いものとする。

施行規則第31条第5号

五 土堤は、火薬類の爆発の際火炎や飛散物が外部へ放出されることを防止し、かつ、軽量の飛散物となるような材料を使用すること。

●施行規則第31条第5号に規定する火炎や飛散物が外部へ放出されることを防止し、かつ、軽量の飛散物となるような材料とは、次の一以上の基準によるものとする。

1. 土
2. ソイルセメント
3. ジオテキスタイルで補強した土

施行規則第31条第7号

七 土堤の堤面には、できるだけ土堤の崩壊を防止するための措置を講ずること。

●施行規則第31条第7号に規定する土堤の崩壊を防止するための措置とは、土堤の堤面を次のいずれかで被覆することとする。

1. 芝草類
2. セメントモルタル
3. 布製型枠（セメントモルタルを使用するものに限る。）